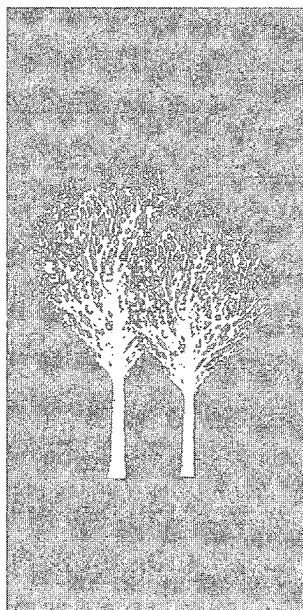


【第4章】

中医学の病因病機



[学習のポイント]

- ①——各種病因の性質と、それによる発病の特徴との関係を理解する。
- ②——いろいろな素因がどのように影響しあって、どのように発病するかを理解する。
- ③——経絡病機と臓腑病機の基本概念を理解する。
- ④——臓腑病機については、その病理メカニズムと変化法則を理解し、さらにそれぞれに現れる症状のメカニズムについて理解する。

中医学では人体の各臓腑・組織間および人体と外的環境は、互いに対立しながら、同時に統一されていると考えている。両者の間にはたえず矛盾が生じては、その都度解決するという関係がある。そうしたなかで相対的なバランスが維持され、人体の正常な生理活動が保たれているのである。この相対的な平衡状態が何らかの原因によって失調し、自己調節により回復することができなくなると疾病が発生する。

病因とは、人体に疾病をおこす原因のことである。中医学でいう病因の範囲はとても広く、内容も豊富である。例をあげると気候の異常・疫癘の伝染・情志の刺激・飲食労倦・過重などによる内傷、切傷などの外傷・傷害などがある。また臓腑気血の機能失調によって生じた病理的な異物、例えば痰飲、気滯、瘀血なども発病因子となりうる。

これらの発病因子の性質や特徴について熟知するならば、疾病の発生のメカニズムを解明することができる。

病機とは、疾病の発生・進行およびその変化の内在的なメカニズムのことをいう。また病機は病理ということもできる。疾病は多種多様で、しかも常に変化するものであり、そのメカニズムは複雑である。それぞれの疾病、また疾病の進行における各段階それぞれに、固有の病理的特徴がある。しかしそれらの病理的特徴を総合的に分析すると、いかなる疾病の発生メカニズムも中医学における主要病機、すなわち「邪正盛衰」「陰陽失調」「気血失調」「臓腑経絡機能の乱れ」としてとらえることができる。上記のような病理変化の法則を把握すれば、疾病を正しく認識・分析することが可能となるのである。

第1節 ● 病因

中医の病因学説は長期にわたる臨床の観察を基礎とし、「しんしょうきゅういん審証求因」[病因弁証のこと]という方法を用い、これを総括しながら形成されてきた。同学説は主に疾病の臨床所見にもとづき、これに自然界の変化法則を組み合わせて各種の発病因子の性質とその特徴を探るものである。

古代の医家は発病因子を外因・内因・不内外因の3つに大きく分類しているが、これらはさらに次の図のように外感と内傷の2つに大別することができる。

外感と内傷

分類	外感	内傷
感邪ルート	邪は外より入る 表より裏へ入る	臓腑が先に損傷し、 病は内よりおこる
疾病の性質	多くは有余（実）である	多くは不足（虚）である
治療原則	外を治し、病邪を取り除く	内を整え、臓腑を調和させ、 正気を養う
病因の範囲	六淫など	七情、飲食、労傷など

中医学の病因認識の特徴は、症状を主な手がかりとして病因を解明することにある。例えば遊走不定〔病位が一定しない〕という特徴をもつ疾病の病因は、風邪と関係が深いと推測することができる。つまり、遊走性の全身の痛みや痒みの症状が、一定のところにとどまらず変動する自然界の風の特徴と一致するのである。そのため、「散風去邪」という方法で治療し症状を軽減あるいは消失させる。これがすなわち「審証求因」の方法である。

① ———— 六淫

六淫とは、風・寒・暑・湿・燥・火の6種類の外感病邪の総称である。

元来、風・寒・暑・湿・燥・火は自然界の6種の異なった気候変化を指すものであり、「六気」と称されている。これらには万物を育くむ働きがあり、人体に対しては無害である。

しかし、六気に異常（例：過剰、不足、あるいは時期に反して出現など）がおこり、人体の適応力をこえたときなどには、六気は発病因子となり疾病を引き起こす要因となる。人体自身の抵抗力が落ちているときも同様である。こうした状況においては、六気は「六

淫^{いん}」, または「六邪」となり, 外感病の主な発病因子となる。そのため, 「外感六淫」ともいわれる。

六淫による発病には, 一般には以下の特徴がある。

1. 六淫による病の多くは, 季節・時間・居住地・環境と関係がある。例えば春季は風がよく吹くので, 風病が多発しやすく, 夏季は暑くなるので暑病が多い。長夏は湿が盛んとなるので湿病が多く, 秋季は乾燥しやすいので燥病が多い。冬季は寒くなるので寒病がおこりやすい。また長く湿地にいと湿病を患いやすいし, 高温のところでは作業をしていると, 燥熱の病にかかりやすいなどである。

2. 六淫の邪は単独で人体を侵すこともあれば, 2種類以上の邪が同時に人体を襲うこともある。(例: 風寒・湿熱・風寒湿など)

3. 六淫の邪は疾病の進行過程で互いに影響しあい, 一定の条件下では互いに転化する。(例: 寒邪が裏に入ると熱化することがあり, 暑湿は長期化すると燥や火に変化することがある)

4. 六淫による感邪ルート^{かんじやく}の多くは, 皮毛あるいは口鼻からの侵入である。皮毛と口鼻から同時に邪を受けることもある。

中医学の病因には, 外邪ではなく, 臓腑・組織・器官の機能失調によりおこる病理変化もある。この場合の病証は風・寒・湿・燥・火諸邪が引き起こした病理変化と類似することがあるが, 本質的には外感六淫とは明らかな違いがある。これらは「内生五邪」と呼称される。内容については「臓腑病機」のところで紹介する。

以下に六淫の性質と発病の特徴について述べる。

【1】風

風は春季の主気であるが, これは年間(四季)を通して現れる。外感疾病は, 風邪によりおこるものが最も多い。また風邪はそのほかの病邪と一緒に人体に侵入することが多い。風邪の多くは皮毛より人体に侵入したのち, 營衛を不通にし, 外風の病証を発生させる。

●風邪の性質と発病の特徴

1. 風は陽邪, その性は開泄, 上部を侵しやすい

風邪はよく動き, 一定の場所に固定しない。その特性は, 昇発・外泄である。風邪が人体に侵入して衛気不固となると, 皮膚腠理が開泄し, 悪風・汗が出るなどの症状が現れる。

また風は陽邪で, 上行しやすい特性があるため, 人体の上部に症状が現れやすい。したがって風邪による病には, 頭痛・鼻づまり・咽喉部の痒みや痛み・眼瞼および顔面の浮腫などの症状が現れやすい。

2. 風は善くめぐり数々変ず

風邪による病の多くは, 部位的にも時間的にも症状が固定していない。すなわち部位も

遊走不定で, 時間的にもときに現れ, ときに隠れるといった特徴がある。

そのほか, 風邪の侵入を受けた場合には, 発病が急であり, 変化が速く, 容易に他の病変へ転化するという特徴がある。

3. 風は百病の長

風邪は六淫のなかでも主な発病因子であり, 寒・湿・燥・熱などの邪は風邪と合併して人体を犯すことが多い。すなわち風寒・風湿・風燥・風熱などの邪となって人体を犯す。このように風邪は, 外感発病の先導者であるといえる。

4. 風は動きやすい

風邪は動きやすいという特徴があることから, 風邪が病をもたらしたときには, 肢体に異常運動や強直がよく現れる。例えば四肢の痙攣・拘攣・角弓反張・口眼喎斜・破傷風・面癱(顔面マヒ)などである。

【2】寒

寒は冬季の主気である。冬の気候は寒冷であり, 気温が急に下がり寒邪が人体に侵入しやすくなる。薄着により寒邪を受けることもある。また冬以外の季節でも雨に濡れたり, 労働して汗をかいた後に冷えると寒邪を受けやすくなる。

寒邪を受けると外寒病証を引き起こす。寒邪が散らず, 長期にわたって人体に影響をおよぼして陽気を損傷すると, 内寒病証となる。

●寒邪の性質と発病の特徴

1. 寒は陰邪, 陽気を損傷しやすい

寒は陰邪である。寒が盛んになると相対的に陽気は衰え, 体内の陰陽のバランスがくずれる。陽気が損なわれて, 温煦作用と気化作用が失調すると, 寒邪を外へ追い出すことができなくなる。また寒邪が鬱滯すると, 悪寒・悪風などの症状が現れる。

寒邪が臓腑に直中^{じきちゅう}することもある。例えば脾胃に直中して脾胃の陽気が損なわれると, 脘腹〔上腹部〕冷痛・嘔吐・腹瀉〔下痢〕がおこる。心腎に直中すると, 心腎陽衰, 温運無力となり, 精神萎靡・寒がり・四肢の冷え・下痢〔未消化物〕・脈微細などの症状が現れる。

2. 寒の凝滯性

寒邪には, 人体の気血・津液を凝集させ, 滞らせて, そのスムーズな流れを失調させるという病理的特徴がある。

陰寒の邪が人体に侵入すると, 陽気の温煦作用と推动作用が抑えられる。そのために経脈の気血が凝滯し, スムーズに流れなくなるのである。これは中医学では「通ぜざれば痛む」といわれる状態であり, これにより多くの疼痛症状がおこる。

3. 寒の収引性

収引とは, 収縮・牽引という意味である。寒邪が侵入して体内の気機が収斂^{しゅうれん}すると, 経絡や筋脈が収縮・拘急をおこす。

寒邪が肌表を侵すと、毛竅・腠理は収縮して、無汗となる。衛気が寒邪と抗争すると悪寒・発熱などの症状が現れる。

また寒邪が血脈に留まると、気血が凝滞し、血脈が拘攣して頭部や身体の疼痛・脈緊などの症状が現れる。

さらに、寒邪が経絡・関節・筋脈に留まると、四肢の屈伸不利あるいは厥冷〔四肢の冷え〕などの症状が現れる。

【3】暑

暑は夏季の主気であり、火熱の気から生じるものである。暑邪は盛夏（夏の盛り）だけにみられる。

●暑邪の性質と発病の特徴

1. 暑は陽邪, その性は炎熱

暑は盛夏の時期に、火熱の気から生じるものである。暑は陽邪であり、炎熱という特性がある。暑邪によりおこる病には、高熱・顔面紅潮・大汗・煩渴・脈洪数大など、火熱が盛んであるためにおこる症状が多くみられる。

2. その性は昇散, 気・津を損傷しやすい

暑は陽熱の邪であり、昇散という特性がある。これが作用して腠理が開くと汗が多く出る。汗が出すぎると津液を消耗する。以上により気が津液とともに外泄して気津両傷になると、口渴・喜飲・尿量の減少・息切れ・脱力感などの症状が現れる。

また暑邪が心包に侵入すると、突然の昏倒・人事不省・四肢の痙攣などの症状が現れる。

3. 湿邪をともないやすい

夏季の気候は温度、湿度ともに高い。人体が暑邪を受けるときには、しばしば湿邪をともなう。したがって四肢の倦怠感・胸脘満悶・嘔悪・下痢などの湿阻（湿の停滞）による症状が現れる。

【4】湿

湿は長夏の主気である。長夏は夏と秋をつなぐ時期であり、湿気が最も盛んな季節である。湿気が多い気候、また雨に濡れたり長いあいだ湿ったところにいることは、湿邪が人体に侵入する原因となる。湿邪はしばしば脾の運化機能に影響をおよぼし、湿濁内生を引き起こす。

●湿邪の性質と発病の特徴

1. 湿は陰邪, 気機を阻害しやすく脾胃の陽気を損傷しやすい

湿は水の性質をもち、陰邪である。湿邪が臟腑経絡に滞ると気機を阻害しやすく、胸悶・胃のつかえ・すっきりと排便しない・小便短少〔尿量の減少〕などの症状が現れる。

湿邪が脾陽に影響を与えると、脾陽不振・運化無力となり、水湿が停滞して、腹瀉

〔下痢〕・尿量の減少・腹水・水腫などの症状が生じる。

2. 湿の重濁性

重濁の「重」とは、字の通り感覚的な重さを表している。湿邪が肌表より侵入して陽気を阻滞させると、頭や身体が重い・四肢がだるいといった症状が現れる。また湿邪が経絡・関節に滞ると、気血の流れが悪くなり肌膚不仁〔不仁とは感覚がなくなること〕・関節疼痛・沈重などの症状が現れる。

重濁の「濁」もまた、字の通り汚く不潔という意味がある。中医学では排泄物と分泌物が汚く異常であることを指す。濁の状態になると、目やにが多い・大便溏泄あるいは粘液便・膿血便・小便混濁・女性の帯下黄白・湿疹などの症状が現れる。

3. 湿の粘滯性

湿には粘膩〔ねっとり粘りがあること〕、停滞という性質がある。湿邪には粘滯性があるため、排泄や分泌がスムーズに行われない。また停滞性のために湿邪による病の多くは治りにくく、経過も長引き、くりかえし再発をみることがある（例：湿温・湿疹・湿痹など）。そのほか、湿邪はまた気機の阻滞を引き起こす。

4. 下降しやすく, 下部を侵しやすい

湿には水の流れのように、下へ向かう、下に注ぐ〔下注〕という特徴がある。そのため湿邪は人体の下部を侵すことが多い。例えば水腫など下肢に現れる例が非常に多い。また淋症・帯下・脚気・下痢なども、湿邪下注によっておこる場合が多い。

【5】燥

燥は秋季の主気である。燥邪には、口鼻から入り肺衛を犯すという特徴がある。燥邪は温燥と涼燥の2種類に分けられる。初秋には夏熱の余気がまだ残っており、これに燥が加わると温燥となる。また晩秋には冬の寒気が近づき、これに燥が加わると涼燥となる。

●燥邪の性質と発病の特徴

1. 乾燥性があり, 津液を損傷しやすい

燥邪は人体の津液を最も消耗させやすい。燥病が生じると口や鼻の乾き・口渴喜飲・皮膚の乾きなどが現れる。さまざまな部位に亀裂が生じたり、毛髪に潤いがなくなったり、皮膚がかさつくこともある。

2. 肺を損傷しやすい

肺はデリケートな臓（嬌臓）であり、潤を喜び、燥を悪むという特徴がある。また肺は気を主り、呼吸を主り、鼻に開竅している。燥邪が体内に侵入する場合は、多くは口や鼻から入り、肺を犯しやすい。これにより肺気不宣や、肺津損耗になると、咳嗽・少痰あるいは粘っこい膠痰となり、痰を吐き出すのが困難になる。また痰に血が混じったり、喘息・胸痛などがおこることもある。

【6】火（熱）

火熱は陽が盛んになると生じる。厳密にいうと火と熱とは異なるものである。一般にいう熱邪は外淫のものが多く、これには風熱・暑熱・湿熱などがある。一方、火は一般には内生の火邪のことであり、これには心火・肝火・胆火などがある。また風・寒・湿・燥などの外邪が長期にわたって体内に鬱していると、これらが変化して火となることもある。外邪が変化して火となったものは「五気化火」と称されている。また喜・怒・思・悲・恐などの情緒が過剰になると火が生じることもある。これは「五志化火」と称されている。これらの内容については、後で詳しく述べる。火と熱は共通した性質と発病の特徴をもつので、一般には区別せずに論じられる。

●火熱の性質と発病の特徴

1. 火熱は陽邪、その性は炎上

火熱は陽邪であり、陽にはあわただしく動き上へ向かう特徴があり、「炎上」する性があるといわれている。そのため火熱による病には、高熱・煩渴・顔面紅潮・目の充血・発汗・脈洪数などの症状が現れやすい。

火の炎上という性によって、神明に上擾〔上部をかき乱すこと〕すると、心煩・不眠・狂躁・妄動・神昏・譫語などの症状が現れる。

また火熱が炎上すると、目の充血・口苦・齒齦腫痛・口舌のびらんなど、人体上部に火熱による症状が現れる。

2. 気と津液を損傷しやすい

火熱の邪は、人体の陰津を最も消耗しやすい。そのため火熱の邪を受けると咽喉の乾きや唇の乾きがおこり、口渴喜飲・尿赤短少〔尿の色が非常に濃くなり尿量が減少すること〕・大便秘結などの津液損傷による症状が現れやすい。また火熱の邪は元気を消耗しやすいので、これを受けると倦怠・懶言・精神疲労・脱力感などの気の消耗による症状をきたすことが多い。

3. 生風、動血しやすい

火熱の邪が肝陰を消耗させ、筋脈が陰精の濡養を受けられなくなると肝風が生じる。これを「熱極生風」という。この場合、高熱・昏迷・譫語・四肢の痙攣・頸項部の強直・角弓反張などが症状として現れる。

また火熱の邪が脈絡を損傷すると、吐血・咳血・衄血〔鼻出血〕・血尿・血便・皮膚出血あるいは斑疹および女性の月経過多・崩漏〔不正性器出血〕などの出血病症が生じる。

4. 癰腫・瘡瘍の形成

火熱の邪が深く血分に入り、一定の局所に集まり、血肉を腐食すると癰腫〔急性化膿性疾患〕・瘡瘍がおこる。瘡瘍がおこったときに現れる局所の紅潮・腫脹・熱痛は、火熱によるものが多い。

六淫の性質と発病の特徴のまとめ

六 淫	性質と発病の特徴
風	陽邪，性は開泄，上部を侵しやすい 善くめぐり数々変ず，百病の長，外感病の先導者 動きやすい
寒	陰邪，陽気を損傷しやすい，性は凝滞，収引
暑	陽邪，性は炎熱，性は昇散で津・気を損傷しやすい 湿邪を伴いやすい
湿	陰邪，気機，脾陽を損傷しやすい，性は重濁，粘滞 下降しやすく，下部を侵しやすい
燥	陽邪，性は乾燥，津液を損傷しやすい，肺を損傷しやすい
火（熱）	陽邪*，性は炎上，気・津を損傷しやすい 生風・動血しやすい，腫瘍を形成しやすい

* これには異論もある

付：疫癘

疫癘もまた外来の発病因子の1つである。しかし六淫よりも、強力な伝染性と流行性をもっている。古代文献の記載によると、疫癘はまた瘟疫、疫氣、疫毒、戾氣、疫邪、異氣、毒氣、乖戾の氣などともいわれている。

疫癘の発病は急で症状も重篤であり、伝染性が強く流行しやすいという特徴がある。

疫癘の多くは、空気・水・食物・汚染物などを通して、口や鼻から人体に侵入し、発病因子となる。

疫癘は散在して発生するだけでなく、広い範囲で流行することもある。

疫癘による疾病には、大頭瘟〔顔面丹毒〕・蝦蟆瘟〔耳下腺炎〕・白喉〔ジフテリア〕・爛喉丹痧〔猩紅熱〕・天花〔天然痘〕・霍乱〔コレラ〕・疫痢・鼠疫〔ペスト〕などがある。

疫癘の発生と流行は、気候の異常、自然災害、環境および衛生状況、流行対策の適否などと密接な関係がある。

② ————— 七情

七情とは喜・怒・憂・思・悲・恐・驚の7種類の情志〔感情〕の変動のことである。

元来、七情とは外界事物に対する情緒反応のことであり、通常は発病因子にはならない。しかし突然強い精神的な刺激を受けたり、長期にわたって一定の精神的刺激を受け続け、生理的に調節し得る許容範囲をこえてしまうと、臓腑気血の機能失調が引き起こされる。このとき七情は発病因子となり、疾病を発生させる。

七情は内傷疾病の主な病因であることが多く、「内傷七情」ともいわれている。

七情の発病の特徴のまとめ

七情	損傷する臓腑	気機の乱れ	発病メカニズム
喜	心	緩	血脈が弛緩し、心気が緩む
怒	肝	上	肝気が過度に昇発し、血は氣に随って逆行する
思	脾	結	運化無力となり、気機が阻滞する
悲 憂	肺	消	肺気が弱まり、意気が消沈する
恐	腎	下	腎気不固により、気が下に陥る
驚	腎	乱	腎が志を蔵さず、神のよりどころがなくなる

人の情志活動と臓腑気血の機能には、深いつながりがある。五臓の精気は各種の情志活動の基礎となる物質であるが、過度の情志刺激はこれに悪影響を与える。そのため、五臓の失調をもたらすのである。

例：心は喜を主るが、喜びすぎると心を損傷する。

肝は怒を主るが、怒りすぎると肝を損傷する。

脾は思を主るが、思いすぎると脾を損傷する。

肺は悲憂を主るが、悲しみ憂いすぎると肺を損傷する。

腎は驚恐を主るが、驚き恐れすぎると腎を損傷する。

七情は各臓を損傷させるが、そのなかでも心・肝・脾の三臓を損傷させやすい。とりわけ心の病証が多くみられる。これは心が神志を主る五臓六腑の大主であり、精神情志の変化はまず心の機能に影響をおよぼして、各臓腑に波及していくからである。

情志が損傷されると、気血の機能と気機の昇降に異常が起こる。临床上、以下の状況がよくみられる。

【1】怒 —— 気上る

怒りすぎると肝の疏泄機能に異常が生じ、肝気が横逆して上衝する。また血が氣に随って逆行し、昏厥をおこすこともある。昏厥とは、突然倒れて、四肢が厥冷〔冷えること〕し、意識不明、人事不省におちいる証候のことである。

【2】喜 —— 気緩む

喜びすぎると心気が緩み、神が心に舍れなくなるため、精神を1つに集中できなくなる。ひどくなると失神や狂乱などの意識の異常がおこる。

【3】悲（憂） —— 気消える

悲しみすぎると肺気が弱まり意気消沈するようになる。

【4】恐 —— 気下る

恐れすぎると腎気不固になり、気が下に泄して（もれて）二便の失禁がおこる。

【5】驚 —— 気乱れる

突然驚くと心神のよりどころがなくなり、驚き慌ててどうしてよいかわからない混乱状態になる。

【6】思 —— 気結す

思慮しすぎると気機を鬱結させ、心を傷め脾を損なう。心神が消耗すると心悸・不眠・多夢・健忘が現れる。脾気を損傷すると運化機能が弱まり脘腹〔上腹部〕脹満・食欲不振が現れる。

このように過度の情志変化は、臓腑気血の機能に変化をおよぼす。逆に臓腑気血の機能が失調すると、情志の変化をひきおこしやすくなり、こうした情志の変化がさらに人体に悪影響を与え、病状を悪化させるという悪循環を形成する。このような疾病の治療には、精神の保養にとくに注意をはらう必要がある。すなわち情志〔情緒〕の障害をとりさり、精神的刺激を除去して、患者に病にうち勝つ決心と信念を持たせ、早期回復をはかるように努めるのである。

③ ———— 飲食と労逸

飲食・労働・休息は、人間が生存し健康を維持していくうえでの基本的条件である。暴飲暴食・過度の労働・無休状態などは発病因子になる。適量の飲食・適度の労働と休息を行っているとは疾病にかかりにくい。またこれらは体質強化や生理機能、健康の維持という面でも不可欠である。

【1】飲食失節

脾は運化を主り、胃は受納を主っている。そのため飲食の失節はまず脾胃を損傷する。さらに脾胃の損傷は他の臓腑や組織器官に影響を与える。飲食の失節には次の3つがある。

1. 飢飽失常

これには飢餓と過食の2つがある。

飢餓状態になると、栄養失調・気血不足・正気不足・抵抗力の低下がおこり、さまざまな病を引き起こす。

過食とは、食物摂取量や食事の回数が多すぎることを指す。このために脾胃の負担が増大すると、水穀が停滞し、食積や食滞を引き起こす。これらの疾病は乳幼児によくみられる。食積・食滞による消化不良はしばしば「疳積」を引き起こし、煩躁・よく泣く・脘腹脹満・顔色が黄色くなる・筋肉が痩せる・手足心熱などの症状が現れやすくなる。

また、油っこい物や甘い物を過食すると熱や火が生じやすい。これが悪化すると癰瘡・

腫毒などの熱毒病証を引き起こす。

2. 飲食不潔

不潔な食物を摂取したり、あるいは誤って毒物を食すると、消化器疾患・食中毒・寄生虫病がおこりやすい。消化器疾患には腹痛・嘔吐・下痢などの脾胃の症候が現れる。

3. 偏食

偏食をすると、栄養素のバランスがとれず陰陽失調をまねき、疾病を引き起こす。

味覚的には、酸味は肝、苦味は心、甘味は脾、辛味は肺、鹹味は腎と密接な関係にある。長期にわたり食生活が一定の味覚に偏ると、臓腑に偏盛・偏衰が現れ、疾病を引き起こす。臨床上よくみられるものとしては、くる病・夜盲症・癩疽〔難治性の腫れもの〕・瘡瘍および消渴〔糖尿病〕などの病証がある。

また偏食によって生じる病としては、まず冷たい物や生ものを好んで食べると、脾胃を損傷して寒湿が内生しやすく、腹痛・泄瀉〔下痢〕がおこる。一方辛くて熱いものを食べすぎると、胃腸に熱がこもりやすく、腕腹脹満・口渴欲飲・便秘・痔瘡下血などがおこりやすい。

飲食が適切であるということは、平素から偏食をせず適度な食事を保ち、病気ときは制限を守るとともに、食物と食器類の衛生に注意するということである。このようにすれば病が口から入るのを防ぐことができ、同時に体質も頑強になり、病気にうち勝つ体力を養うことができる。

【2】劳逸

適度の労働や運動は体質を強化する。また十分な休養は疲労をとりのぞき、体力を回復させる。

一方、過労や怠惰な生活は発病因子となる。過労は、体力・脳力・房事の3方面に大別される。

1. 労力過度

過激なあるいは長期間の肉体労働により、疲れがたまり気血を消耗すると、精神疲労・消瘦などの症状が現れる。

2. 心労過度

過度の思慮は、心脾を損傷し心血を損傷する。そのために心神失養となると、心悸・不眠・多夢がおこり、脾気を損傷すると、腹脹・食欲不振・泥状便がおこる。

3. 房事過度

房事に節制がないと、腎精を消耗する。腎精が不足すると腰膝酸軟〔だるさ、軟弱化〕・眩暈・耳鳴り・精神萎靡が現れる。また男子では遺精・早泄、女子では閉経・帯下が現れる。

4. 安逸過度

長期にわたり運動不足の状態が続くと、気血の流れが悪くなり、脾胃の機能も衰える。これは過度の安逸によるものとされる。この場合、食欲減退・無力感・肢体軟弱・精神不振・動くと心悸・气喘がおこり、さらに多くの疾病を引き起こすことになる。

④ ——— 外傷

外傷因子としては、打撲・捻挫・骨折・切り傷・虫さされ・火傷・凍傷などがある。外傷後は体内に瘀血が停滞しやすいという特徴がある。

⑤ ——— 痰飲と瘀血

痰飲と瘀血は、臓腑の機能が失調して体内に生じる病理産物である。これらの病理産物が形成されると、直接または間接的に臓腑や組織に作用して多くの病証を引き起こす。そのため、これらもまた病因の1つとされる。

【1】痰飲

痰飲は肺脾胃の3臓の機能が失調したために、水液代謝に障害がおこって生じる病理的な産物である。

粘稠なものを痰、水様のものを飲といい、一般にはあわせて痰飲と称している。痰には、有形のものと無形のものがある。有形の痰とは気道から喀出される痰のことである。無形の痰とは、臓腑経絡中に停滞している痰のことを指す。瘰癧*1・痰核*2・流注*3・梅核氣*4などの病証は、痰邪によっておこる。中医学では原因不明の病は痰邪により生じることが多いと考えており、「怪病多痰」といわれている。

飲邪は水液が停滞する部位と証候の差異にもとづき、痰飲・懸飲・溢飲・支飲の四飲に分けられている。腸間に停滞するものを痰飲、脇下に停滞するものを懸飲、四肢に停滞するものを溢飲、胸に停滞するものを支飲という。

痰邪は内では臓腑に停滞し、外では筋骨皮肉に停滞する。飲邪は内では胸脇・胃腸に停滞し、外では肌膚に停滞する。

痰飲は主に肺失宣降による水津の停滞・脾失健運による水湿の停滞・腎陽虚衰による水湿不化・三焦不通による水気互結などにより、湿が集まることで形成される。

痰飲病の臨床所見

- 咳痰・量が多い、喉に痰鳴がする、胸悶、動悸
- 食欲減退、悪心嘔吐、腹鳴、腹満、めまい、浮腫
- 舌苔厚膩、脈弦滑

- *1 瘰癧——主として結核性頸部リンパ腺炎をいう。
- *2 痰核——皮膚の下が腫れて核のような結塊ができるものをいう。
- *3 流注——毒邪が流走して定まらず、不定の箇所注いで、比較的深部の組織に生じる化膿性の病症である。
- *4 梅核氣——ヒステリー球に相当する。

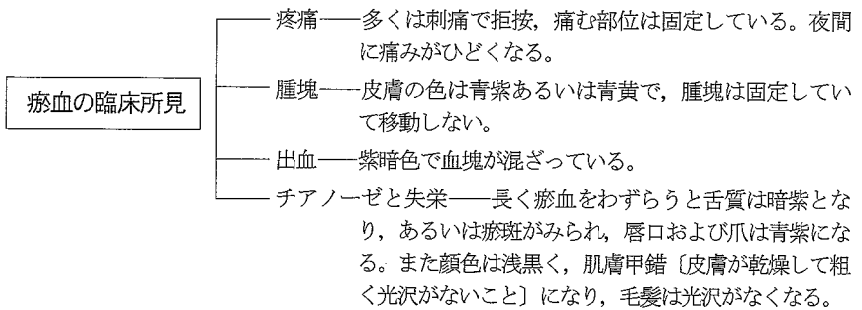
【2】瘀血

瘀血は血液の運行が緩やかになりすぎ、血液が臓腑や経絡に停滞すると生じる。また経

脈から離れた血がすぐに消散あるいは排出されない場合にも生じる。こうした状態を指して、中医学では「久痛入絡」「久病多血瘀」と呼んでいる。

●瘀血の形成原因

- ①気虚：気虚のために気の推动作用が弱くなり、血液の流れが緩慢になると瘀血が形成される。
- ②気滞：気滞のために気の流れが悪くなり、血液の流れも阻滞されると瘀血が形成される。
- ③血寒：寒により経脈が拘急し、血液が凝滞すると瘀血が形成される。
- ④血熱：熱の影響をうけて、血液中の津液が消耗され、血液の粘稠度が高くなって血液の運行が悪くなると瘀血が形成される。
- ⑤そのほかの内傷と外傷：経脈から離れた血が体内に集まって瘀血が形成されると、局所さらには全身の気血を鬱滞させ、広範囲にわたる瘀血を形成することがある。



瘀血の部位別臨床所見の例

瘀血部位	臨床所見の例
心	心痛、心悸、胸悶
肺	胸痛、咳血
胃腸	吐血、タール状便
肝	脇肋痛、痞塊
脳	癡狂
胞宮	月経不順、月経痛、閉経、崩漏
肢体肌膚	腫痛、青紫
下肢	脱疽

復習のポイント]

- 1) 中医病因学の分類とその特徴を説明できる。
- 2) 六淫の性質とその発病特徴および常見病証について説明できる。
- 3) 七情と臟腑との関係について説明できる。
- 4) 飲食と劳逸、外傷、痰飲、瘀血の発病特徴について説明できる。